

## ○今、12. 不當逮捕者全員を即時 釈放せよ！

- 学校当局は機動隊の学内乱入に抗議し今後一切国家権力を学内に入れないことを表明せよ。
- 機動隊学内導入規制を徹底させ大管法の国会上程を粉碎しよう！
- 大学の自らを守り抜く明大全階層の民主的学内諸組織（学生会・教授会・職員組合・生協・学組等）の眞の自治権を保障する“全学協議会”を設置せよ！
- 一部学生集団による自由会の非民主的ひきまわしと「全学バリケート封鎖」→「大学解体」→「二重権力による武装対決」→「革命的敗北」なる小ブル急進主義の学生運動糾弾！

明大民主青年同盟  
生田 理論政策委員

要求して起らわることを企てておられます。すでにこの件にとって、現在東京駿大・中央大・東京外語大・明治学院大・上智大・日大など大学当局よりロックアウトを行なわれ機動隊の拘束という異常な事態に陥らわっています。そしてさらに、政府自民党は1970年4月23日の安保改訂日を前にして、大學に対するより一層の統制を加えようと、高名高い治安維持法の学生版としている「大學秩序回復臨時措置法」を中教審の中間報告案に基づいて立法化しようと企てています。もしこれが凶暴を通じて、戦後戦後とつづけて勝ち残られてきた大學の自らを守ることを奪い去られる危機感あるものなのです。

今回の明治への機動隊の無差別攻撃は、このような政府は民衆が70年対策の一環として行なわれたものであることは疑う余地がないものなり。しかも彼らの学生対策は「主張は學連は深めで利用しないがよい」（保和官房長官）という方針のもとに進行し「学生運動をやるものは全て暴力学生だ」「アカだ」とたぐみに説教操作を行い、暴力的強化、機動隊、自衛隊の増強強化を黙々と押し進め70年を乗り切ろうとしています。

私は丁度この機動隊の学内乱入、多くの犠牲の不當逮捕のねらいと本質は、政府自民党的大學自治破壊の一環として行なわれたものであり、大學の自主的民主的な教育・研究・学内の発展を否定し直接介入してきたものとしてとらえ、思想・心情・イデオロギーが異なるうとも、大學の自らを守り、學内の自由を守る立場から、全ての大学人が起らわることを必要ではないでしょうか。

そしてさらに、これら政府文部省の大學支配と結びついて大學の「産学協同」「軍学協同」「マスク・ロ授業」を官利主義的に追求する反動理事局（各日本一流）の姿勢を強調として追求し、學園の民主を勝ちとつてい

## 全ての斗争学大政治ハ

〔討議試料〕

○4.12 機動隊乱入をどうみるか？

4月12日5時、日大の「法経寄宿」を叫んで明治大学の学館を出発した日大「全共斗」約100名は待機していた機動隊にぶつかると直ちに明大学館に逃げこむ。されば、機動隊はガス銃を発射しながら明治の学内に乱入し、不正にサークル活動を行なっていた「法研」「音研」「人研」をはじめとする学生126名を逮捕された。

この事態は一体何をもつがっているのであろうか？

まず第一に、この事態は國家権力による大學自治の壊滅・とりわけ学生の自主的なサークル・セミ自治活動破壊をねらった直接不当介入であることを明らかにしなければならない。

警視庁は昨年2月11日「警察の学内出動基準」を出し、大學当局の要請なくともいつでも警察力を学内に導入できるようにしました。これは、警察力をもつて大學に導入するかの判断は、現場の指揮官の自由に任せられるとしているので、必要とあらばいつでも学内に勝手に入り込み強制調査、強制逮捕ができるという、大學の自治を全面的に否定する戦前、戦中に見られた極めて反動的なものです。今回の事態は眞にこの「警察の学内出動基準」を地でいたものといえます。さらに、政府文部省は、昨年7月19日「学技能停止措置法」の立法化を表明しましたが、中で「大學の混乱が期間規模等で一定の基準を越えた場合、その大學の教育機能は自動的に停止される」との学生が憲法や教育基本法で保障されてる「學向の自由（第23条）」や思想・心情・表現の自由（第19条）に基づき、大學の改革や制度の改善を

こう則りありません。

今回の事件を眞に「生ずる道」は、政府文部省と反動的理事局の大學支配に抗し、明大全階層の民主的諸組織（学生会、教授会、職員組合、生協・学組等）の团结を勝ちとり、「全学協議会」を設置し、「大學を民主主義の器」とすることはないでしょうか。

## 新しい大学自治の創造をめざして

### 大学とは、教育とは？

実は、この問いに答えるもの自身が、通常学生が造りにゆくにうごく時ははじめてこの問題は具体化されるのではないかだろうか？つまり既存の大学を既存の概念を批判的に生きこまれて、つれこまれ分割された知識の断片を枚挙的に構成記述するにとどまっていたら、大學も教育も問題とは言らないのではないか？ そこにある教育とは「いかに多く暗記して、いかにすばやく正確に知識を引き出すか」という能力以外にはなくなる。

これは、創造的能力の養成とは対するものではない。大學がこのようないのものであるならば、そこには权威と服従のみが支配することになるだろう。

それに対して、もしも明治学生が大學教育の問題を自治の全体（住むところの自分）を位置づけること切り離して考えならば、「大學の教育とは何か」を眞に自らのものとしてとらえることはできないのではなかろうか？

丁寧的につて、大學の成り立ちは、「学ぶ者と教える者との一丸となった集団」としており、それは当初ならその権利を守るという意味で「抵抗の精神」「反抗力が想定」であった。特にルネサンス以降は「教師と学生の生

（アーリスト）「教師と学生の法律を権利とする团体」として、アリストも「大学規則、学則統制に対するものとして集会あげられ（さて）」と、近代が貴化（自主的・民主的）な学問を発展しようとするとすれば、宗教奴隸制へ統制排除しなればなりません。大学の自由にては、学問研究から対する反対勢力（权力）の直面に抗して大学の自由を確立し、学問の自由にて学問研究の発展を勝ちとろうとする先駆者の血と汗の物語です。

学問の自由とは国民が眞理を保証する（オルタネート）ことをうたっています。この学問の自由とは如何様に考えられます。

学問の自由とは国民が眞理を探求する自由であり、学問的見解の自由としての発表、表現の自由、学問的見解を教育することの自由がその中に含まれます。するべく永遠は学問の自由を真に勝ちとらなければならぬのようだ。教育エンジンも空想でしかなくなる。学問の自由を制度的に保証する大学の自由が確立されなければなりません。眞の学問研究の発展はあり得ない。これが大学の自由下史の教訓と云ふではないでしょうか？

## 教授会は权力の末端組織となり、もじめ守るべき民主主義はないのか？ 大学の自治は幻想にすぎないのか？

（アーリスト）学校（資本主義体制の学校）は、つねに主張（学問の学校であり、主張についての学校）をもつた。（レーニン）このことは、多くの大学教育においても同様である。独立資本は自分の企画の実現の自由に有り、それが実現されると、その企画は、その企画をもつて、じきにその企画を実現する。

藝術を学ぶことによつて不可避的に學生が持つ批判的想像的構造を潜在的なアーティショナルティオロギーでおしつぶさうとする。なぜなら美しい、自然観、世界觀（生）とつき学生が社会利益を考え、独立資本主義のもつ根本的欠陥、矛盾を把握することを恐れるからである。ここに授業が統合的に、精神主義に走り内容の理解が伴はれぬ無意味なものとなる理由がある。自然科學や技術教育不適切である方面とそれはあくまで現在のものだけに対する範囲に限定され、科学、學問の発展は押えられる結果となるのである。されば大學は一齊学生諸君を養成する如く「大学は暴力力商品の生産工場」となり、大学における教育は全面否定されなければならないものだろうか？しかしこの立場が専門教員である限り「教育工場の管理者＝教授会＝权力の末端組織として必然的に位置づけられるのである

この規定従えば、教授会が必ず議論することも、學生が講義を受けることもそれ自身が資本の要求に対して機能することを受けるとともに、自身が資本の要求に対して機能することになり、ナセスである。眞の学問の創造とはこれを拒否し破壊する以外はないという癡情におひづく、すみれ、彼等に言わせれば「フレタリニアトへの立場」といふ間には浪費がふるうするに機械を放棄し、ヘルメットと角棒をもつて、運動と熱中する以外のものではないのである。しかも、それは「フレジョア大学全体をとおしての可能である」とする立場から力に付する即ち無能派としてあらわれるるのである。

（アーリスト）

まさに「革命」までの本流のストライキを主張しているのである（永遠のストライキ・裏にここにトロツキーの承継革命論とのゆきが見られる）。我々は彼らをトロツキストないしはそのエピゴーーン（健志としてとらえる）ここに彼らの斗争の本質がある。すなわち大学がストに入いる理由は何でも良いのである。「授業料値上げ反対」であろうか？「學館問題」であろうが今更の如く機動隊との衝突であろうが原因は何でもよくなる。専門大衆（学生）が、いかにどれだけ多く斗う部隊として彼らの回りに集まるか、その姿さえつかめればよいのである。三ヶ月トロキストの主張は一見左翼的で「革命的であるが、實際はマルクスもレーニンも大きく違離している」といって「おめてたい」「理論でいかない」教育工場「解体」なるものは、かくて「機械的労働者を苦しめるものとして機械うちこわしい運動を行った労働運動の前世紀のイラン・機械打ちこわし主義化」大變のないものである。もし彼らが自らの倫理や忠実であるといふならばすべての教育を否定しなければならない労働者も自己の労働力をもって剩余労働をアジャマーに提供するのだから労働を否定しなければならないくなる。だが生産手段を奪われた労働者が労働を拒否したらどうなるか？結果は「生きて劳动者をアーティショニア威威で生きる事を拒否せよ＝自殺せよ」である。「フレジョア大学で学ぶことを拒否せよ」この空疎なスローガンは学生なくとも食っているのであり（連中のたわごとに食すぎない）、レーニンは常にぐるぐる述べている「古い學校はつねに主導的の學校であつて、古い學校は死んでしまつて、新しい學校が生えてくる」というのを理解していない。

また役人に應えた。しかし諸君又人間の知識によって蓄積されたものを習得しないで共産主義者になれるという結論をひきだそつとするならとてもないまつないである。

共産主義そのものの知識の総和の結果であり、それを習得しないで共産主義的スローガン、共産主義科學の知識を習得するだけで十分だと見えるからちがひであらう」と。

すなわちここで語られていることは資本主義体制の教育の教育を指摘しつつも少し、青年學生の立場には、その中々の人類の達した知識の総和の良くなよいものと悪いものとをえりわけて批判的に採取し發展させることを述べているのである。そして學ぶことを拒否せよとは一言も言ってはいけないのである。労働者階級は旧社會で自己の創り出した物質的財産を新しい社會にもたらしてゆくのであり現制度の下で生じるもの、或は生むものと手を打っていくのである。大学の自治は「教授会自治」と規定されれば大学の自治は非常にゆがめられる。

しかし「教授会自治」では政府文部省の間に一定の矛盾はあるのである。むしろ問題は「教授会＝國家权力の末端組織」としてとらえることと問題の解決には有利ない。われわれは教授会の自治化に权力の介入により形骸化されてきてゐることとむろん、学生の参加を骨む方向で管理運営の民主化も廢止され、その上で教授会の自由をも大学の自治の中心に正しく位置づけてとき、教授会の自治は正しい機能を發揮するが、むしろ教授会は、教授会と共通して大学の運営に寄与する立場をもつてゐるのである。

ひとつは反対の派手な、キストの主に対する如く「おとこ骨=国家権力の末端結構」と攻撃し、大學解体とな自己管理となりて暴力をほしいままにふるさうことは、教授会には大學を管理する能力はまったくなくなつたという口実を政府反動に与えて大學の反動的再編に手をねば結果となる。

すなわち彼らのやっていることひ、実際は帝國主義的再編に手をねば結果となっているのである。

私たちば、学生、教授、職員、各学内諸組織が各組織の要求を取り上げそれを反映する本拠地、全學懇談会の設置を勝ち取らなければならぬ。

すなわち大學自治の構成体は教授会だけではなくすべての學内階層が参加するという基本的立場を確立することである。之のことかとれだけ反動を配局に打撃を与えるかと、東大の確認書及び北大長選舉に対する政府文部省の報道のような攻撃をみれば明らかなろう。

私たちは新しい大學の構築をしなければならない。  
學問の自主的・民主的発展を勝ちとらなければならぬ。

そのためにはなによりも新しい大學の自治一破壊ではなく創造を勝ちとらなければならぬ。

そしてそれは、日本の平和と民主主義を争いとする全人民の争いと結合してゆかなければならぬ。

なぜなら、『真の學園民主化は人民の民主権力の下にあいてのみ全面的に開かれるもの』

めのなかで、1969.4.14 MON. 13:30

(MEMO)